

# 村上助九郎氏所蔵『和歌』

## ― 解題と翻刻 ―

芦田耕一

ここに翻刻するのは、島根県隠岐郡海士町の村上助九郎氏（後鳥羽天皇御火葬塚守部）の所蔵になる『和歌』である。書誌的説明から始めよう。写本、全一冊。袋綴で、縦二六・四糎、横一八・六糎。表紙、本文とも同質の楮紙。表紙中央に墨で「和歌」と打ちつけに書かれている。内題はない。表紙左下に「<sup>主</sup>秀延（花押）」とあるが、墨で縦に線を入れて消したような形になっている。右下には「<sup>主</sup>春隆（花押）（朱印）」とある。村上助九郎秀延（第四十一代）から村上助九郎春隆（第四十二代）に移ったことを意味しているのだろうか。表紙の見返しの右上に「文化七（一八一〇）年時代書者は秀延なり」という墨書がある。但し、「遠島百首」のあとに「文化十三年<sup>丙</sup>五月廿四日写之」とある。全七十一丁よりなるが、うち末尾に遊紙が十五丁あり、墨付は五十六丁である。一面は九行で、和歌は上下句二行書き。虫喰が少しある。人名が朱で書かれており、また鉛筆らしきものや桃色で後に書き込まれた箇所もある。

次に簡単に内容を紹介しておこう。（翻刻の(1)から(2)の数字は私

に付した）

まず、(1)はすべて『新古今集』の歌であり、「四季」や「恋」等の主要な部立から抜き出している。上に記される「後鳥羽院」以下は作者であり、下の「左大臣兼熙公」以下は歌を選出した人か。これらは奉納されたものであろう。考証は省略に従うが、選出した人の在職年時から考えて、元禄十三（一七〇〇）年十一月八日以降、同十四年二月二十一日までの所為である。

(2)は「定家十体」に挙げられる例歌から各一首選び出したもの。「有栖川宮幸仁親王」以下は選出した人か。これも奉納されたものであろう。選出した人の在職年時から、元禄二（一六八九）年十二月二十六日以降、同六年十月二十五日までの所為と考えられる。

(3)は「遠島百首」であるが、小原幹雄氏のご研究もあるので省略する。（島根大学論集（人文科学）四号、昭二十九・三、等）

(4)は氏成が寛永九（一六三二）年三月十日に後鳥羽院御陵に参詣した時のことか（『続史愚抄』）。「夏日」とあるので、三月十日は京都を出発した日であらうか）氏成は藤原道隆の流れをくみ、水無

〔407〕

瀬氏。寛永二十一年に七十四歳で薨じる。

(5) はいつのことか不明。氏信は氏成の孫で元禄三年七十二歳で薨。

(6) は「短冊式拾首」とあるが、二十一首ある。「隠岐院宝物之記」

(後出)にはこれを「寛永十五年(十六年であろう)二月廿二日四百回聖忌」の折とするが、作者の烏丸光広が寛永十五年七月十三日に薨じていること、『統史愚抄』寛永九年三月十日条の氏成御陵参詣の折に「此序院(注、後水尾院)被<sub>レ</sub>納<sub>二</sub>御製和歌<sub>一</sub>」<sup>二</sup>とあること(二十首全部が御製という意味ではなからう)からみても、寛永九年のことではないか。書写者藤原兼原は水無瀬氏成の孫具英が祖である町尻家で、後に量原と改名した。書写年代は在職年時から明和八(一七七二)年正月十日から安永六(一七七七)年十二月十八日までの間。前記『宝物之記』に、安永二年に源福寺(後鳥羽院の配所)の求めに応じて兼原の書写したのが見える。達筆であったのだろう。

(7) は「としは百を四かへりにおよび」とあるので四百回聖忌かと思われ、寛永十六年二月二十二日に氏成が御陵に参詣した。歌十五首は氏成作であろう。

(8) は(7)の折のことと思われる、「自<sub>レ</sub>院(注、後水尾院)被<sub>レ</sub>献<sub>二</sub>御法楽和歌<sub>一</sub>者」(『統史愚抄』)とみえる。院が代表として諸公卿の歌を奉納したものか。「西里」「高田山」「成沢池」「籬島」など、隠岐郡都万村の高田明神所藏『高田明神至徳百首和歌』(十四世紀末の成立)と共通する歌枕が詠まれていることに注意したい。

(9) は澄覚が安永元(一七七二)年冬に源福寺僧に託して奉納した三十一首。『新古今集』『雑歌中』の後鳥羽院詠「奥山のおどろが下

もふみ分けて道ある世ぞと人に知らせん」の三十一字を順次三十一首の各歌の頭に据えて詠んだもの。澄覚は冷泉為村の法号で安永三年に六十三歳で薨じる。

(10) は町尻兼原が明和八(一七七二)年十月に源福寺僧に託して奉納したもの。「つつしむでたてまつる」を(9)と同じように詠みこんでいる。

(11) は藤原(細野)為景が奉納したもので、為景は四十一歳で承応元(一六五二)年に卒しているので「壬申」は寛永九(一六三二)年である。寛永九年は(4)で述べたように氏成が夏に御陵に参詣した年であり、氏成に託して奉納したものか。

(12) は氏信・兼豊父子が天和二(一六八二)年に源福寺僧に託したもの。兼豊は宝永二(一七〇五)年に五十三歳で薨じる。

(14) は氏孝が源福寺僧に託したもの。いつのことか不明。氏孝は兼豊男で寛保元(一七四一)年に六十七歳で薨じる。

(15) (16) は省略。

(17) は源(竹内)俊治が詠んだ三十首。「藏人左近衛将監」であった寛永五(一六二八)年正月二十二日から三十七歳で卒する正保四(一六四七)年八月二十一日までに詠まれたもの。

(19) は省略

(20) は地下人の詠で、実在の確かめられる人物はいない。

(21) の「あふことの……」は『拾遺集』「恋一」に入り、『百人一首』に採られる著名な歌。作者名と選出した人を並べる書き方は(1)にあった。「定誠」が「前内大臣」と呼ばれるのは貞享三(一六八六)年三月以降元禄五(一六九二)年三月二十六日の落飾まで。「君が世

に……」は『新古今集』「賀」の藤原範兼詠。ここも氏孝が選び出したというであろう。「うぐひすの……」は『新古今集』「春上」の後鳥羽院詠。「見わたせば……」は『新古今集』「秋上」の藤原定家詠。選出した「妙法院宮」は(1)に見えた堯延法規王のこと。これら四首がなぜここに紛れ込んだのか不明。

叙上のように、後鳥羽院御陵に奉納した歌が大部分であることか  
らみて、(1)(2)もいつの折か貴顕が奉納するために各人好みの歌を選  
び出したものと思われる。断片ではないが(2)も同様と考えられる。

以上、『和歌』を説明してきたのであるが、これに類するものがある。島根大学附属図書館所蔵の源光暉写『隱岐院宝物之記』は(1)(2)(18)(19)(20)を除いて多くが共通する。そして『和歌』を書写したのもも伝わっている。福山脩氏所蔵の『和歌』がそれであり、村上家本を少し後の文政十二(一八二九)年十二月吉日に福山龜壽がほぼそのままの体裁で忠実に写しとったものであるという(未見)。この福山本を小瀧空明氏が「島根評論」第十六卷第四号(昭十四・三)に「寛永九年——安永元年」隱岐院御廟奉納和歌」という題で、翻刻し簡単な説明を付けて発表されている。ただ誤植等があり、また発表誌の関係もあって知られることが少ないと思われるので、ここに新たに翻刻しておきたい。

凡 例

一、翻刻にあたって、用字法・仮名遣いなど底本に忠実であること

につとめたが、異体字については通行の字体に改め、読解の便をはかつて濁点表記を施し、返り点(原則として)や句読点を付した。本文提供の趣旨から改行については元のままでないところがある。鉛筆のようなもので後人がよみを示した箇所は省略した。一、底本の誤字・脱字等と認められる場合は「(ママ)」と注記した。また「(〇〇カ)」と傍記して推定本文を示した箇所もある。一応よんだが不審の残るよみについては「(?)」を付した。よめない場合は「□」で示しておいた。  
一、各半丁の終りを、墨付の丁から数えて、「1オ」、「1ウ」等で示した。

一、虫喰がひどく読みにくい箇所は傍線を引いて示した。そして前述の『宝物之記』の本文によって示した。

一、末筆ながら翻刻を快諾していただいた村上助九郎氏に心から御礼申し上げる次第である。

翻 刻

(1) 後鳥羽院 鷹司 左大臣兼熙公 ヒロ

前中納言定家 定家 右大将伊季卿 ヒロキミ

梅花にほひをうつす袖の上に軒もる月の影ぞあらそふ 清閑寺大納言  
後鳥羽院宮内卿 熙定卿 (朱)

うすくこき野べのみどりの若草に跡までみゆる雪のむらぎえ」1  
オ

参議雅経

柳原前大納言資廉卿(朱)

岩ねよりかさなる山をわけすて、花もいくへのあとのしら雲

能因法師

中院前中納言通躬卿(朱)

山里のはるの夕暮きてみれば入あひのかねに花ぞちりける

後京極摂政前太政大臣

重條卿(朱)

忘るなよたのむのさはをたつかりもいなばのかぜの秋の夕ぐれ

1ウ

皇太后宮大夫俊成

実陰卿(朱)

駒とめて猶水かはむ山吹の花の露そふるでの玉川

寂蓮法師

葉室前大納言頼孝卿(朱)

暮てゆくはるのみなとはしらねどもかすみにおつるうぢのしば舟

六条前太政大臣頼実

基長卿(朱)

ほとゝぎすなきているさのやまの端は月ゆへよりもうらめしきかな

2オ

藤原基俊

難波前中納言宗草卿(朱)

玉柏しげりにけりな五月雨にはもりの神のしめはふるまで

従三位頼政

醍醐中納言昭尹卿(朱)

庭のおもはまだかはかぬに夕立のそらさりきなくすめるつきかな

前大僧正慈円

基量卿(朱)

雲まよふ夕にあかたをこめながら風もほに出ぬ荻の上かな

法橋顕昭

川鱸前中納言実陳卿(朱)

水ぐきのおかのくず葉も色付けてけさうらがなし秋の初風

鴨長明

西洞院前宰相時成卿(朱)

秋かぜのいたりいたらぬ袖はあらじたゞ我からの露の夕ぐれ

大藏卿有家

平松宰相時方卿(朱)

かぜわたるあさぢがすゑの露にだにやどりもはてぬよひのいなづま

3オ

宣秋門院丹後

飛鳥井三位雅豊卿(朱)

忘れじな難波のあきのよはの空ことうらにすむ月はみるとも

皇太后宮大夫俊成女

経尚卿(朱)

あくがれてねぬよのちりのつもるまで月にはらはぬ床のさむしろ

西行法師

今城中納言定経卿(朱)

きりぐす夜さむに秋のなるまよによはるかこゑのとをざかりゆく

3ウ

後久我太政大臣通光

光顕卿(朱)

明ぼのや川瀬のなみのたかせ舟くだすか人の袖の秋霧

従二位家隆

清水谷前大納言実業卿(朱)

露時雨もる山かげのした紅葉ぬるともおらむあきのかたみに

大納言通具

梅小路宰相共方卿(朱)

霜こほるそでにもかげはのこりけりつゆよりなれしあり明の月

4オ

藤原秀能

交野三位時香卿(朱)

風ふけば余所になるみのかたおもひおもはぬ方になく千鳥哉

式子内親王

中院前大納言通茂卿(朱)

さむしろの夜はのころもでさえくはつ雪しろし岡のいの松

崇徳院

万里小路前大納言淳房卿(朱)

みかりするかたのゝみのにふるあらあなまゝだき鳥もこそたて

4ウ

後法性寺入道前関白太政大臣

伏見中務卿宮邦永親王(朱)

しのぶるに心のひまはなけれども猶もるものはなみだなりけり

二条院讃岐

日野頭弁輝光朝臣(朱)

みるめこそ入ぬる磯の草ならめ袖さへ波のしたに朽ぬる

後徳大寺左大臣

妙法院宮亮延法親王(朱)

さめて後夢なりけりとおもふにもあふはわかれのおしくやはあらぬ」5才

源俊頼朝臣

日野西前宰相国豊卿(朱)

あしのやのしづはた帯のかたむすびこゝろやすくも打とくるかな

正三位知家

裏松前中納言意光卿(朱)

これもまたながき別に成やせむ暮をまつべきいのちならねば

西園寺入道前太政大臣

久我大納言通誠卿(朱)

恋わぶる涙やそらくもるらんひかりもかはるねやの月影」5ウ

八条院高倉

中山大納言篤親卿(朱)

いかゞふく身にしむ色のかはるかなたのむるくれの松かぜのこゑ

小侍従

葉室中納言頼重卿(朱)

つらきをもうらみぬわれもならふなようき身をしらぬ人もこそあれ

大納言経信

野宮中将定基朝臣(朱)

ゆふ日さす浅茅がはらのたび人はあはれいづこにやどをかるらむ」6才

前大納言忠良

姉小路前中納言公量卿(朱)

折にあへばこれもさすがにあはれなり小田のかはづのゆふぐれの

こゑ

前大納言兼宗

高野前中納言保春卿(朱)

世をすつるこゝろはなをぞなかりけるうきをうしとはおもひしれども

藤原清輔朝臣

近衛 右大臣家熙公(朱)

としへたるうぢの橋もりことゝはむいくよになりぬ水のみなかみ」6ウ

第一幽玄躰

有栖川宮幸仁親王(朱)

わびぬれば今はたおなじ難波なる身をつくしてもあはむとぞおもふ

(2)

第二長高躰

清水谷大納言実業卿(朱)

思ふことなどゝふ人のなかるらむあふげばそらに月ぞさやけき

第三有心躰

葉室前大納言頼孝卿(朱)

つづくにのなにはの春はゆめなれやあしのかればにかぜわたるなり」7才

第四麗躰

堀川三位康綱卿(朱)

ほのくゝとあかしのうらの朝霧にしまぐれゆく舟をしぞおもふ

第五事可然躰

桑原民部太輔長義朝臣(朱)

大かたのあきのねざめのながきよも君をぞいのる身をおもふとて

第六面白躰

押小路三位公音卿(朱)

山里にうきよいとはむ友もがな悔しくすぎしむかし語らむ」7ウ

第七濃躰

飛鳥井三位雅豊卿(朱)

ちらすなよしのゝはぐさのかりにても露かゝるべき袖のうへかは

第八見様躰

石野少将基頭(朱)

村雨の露もまだひぬ槇のはに霧立のぼる秋の夕ぐれ

第九有一節躰 滋野井少将公澄(朱)

立かへり又もきて見む松島やをじまの苦屋波にあらすな」8才

第十鬼拉躰 冷泉中将為綱朝臣(朱)

ぬれてほす玉ぐしの葉のつゆじもにあまてるひかりいくよへぬらん  
(六行分空白) 8ウ

(3) 隠岐院遠島百首

(和歌百首は省略)

文化十三<sup>丙</sup>五月廿四日写之」20才

(4) 夏日陪 隠岐廟前 同詠 池蓮和歌

従二位藤原氏成

世とゝもにすむ池水やはちす葉のつゆの心をこゝろなるらむ

(5) 夏日奉 隠岐廟前 詠 懐旧和歌

従二位藤原氏信

いにしへをおもいもえそふおきの島の」20ウむかひのもりに螢とぶころ  
(二行分空白)

(朱) 印印

(四行分空白) 21才

(全部白紙) 21ウ

(6) 従 禁裏 御奉納之御短冊式拾首

後水尾院(朱) 院撰(朱)

雲かすみうみよりいでゝ明そむるおきの外山や春をしるらん

野若菜 烏丸大納言光広卿(朱)

さと人の野辺に出ても世を思ふきみがためなるわかなつむらし

春日 中院中納言通村卿(朱)

思ひける浪ぢかなしきおきの海の」22才むかしもとをくかすむ月

かげ

寄雲花 下冷泉為尚卿(朱)

まだきよりいそぐ心の立かへり花をもまがふみねの白雪

苗代 柳原中納言華光卿(朱)

たのみをば秋にかりくるそしる田に苗代水をせきいるゝより

郭公 阿野中納言実頭卿(朱)

杜鵑むかしながらの声たてゝ」22ウなくや山田のさなへとる頃

松下泉 園宰相基音卿(朱)

わきいづる岩ねの清水まつ風ともに夏なきこゑのすゞしさ

七夕契 近衛殿信寄公(朱)

年をへてまれのあふせにかへる世はいかに契りし天川浪

秋夕 烏丸中納言光賢卿(朱)

蓬生の夕よいかにさびしさは」23才ながめなしても萩の上風

雲端雁 八条院撰智忠(朱)

天津空雲のはつかにくる雁の翅もしるきあきの夜の月

河月 清水谷忠定卿(朱)

水無瀬川みぎはの浪の音までもそらにぞすめる秋の夜月

擣衣 聖護院宮道晃法親王(朱)

あきふかき夜さむをおなじ心とや」23ウ里をあまたに衣うつらむ

寒草 飛鳥井中将雅昭卿(朱)

置霜に尾ばなが袖もむすぼゝれはらひかねたる冬枯のころ

庭初雪

水無瀬中納言氏成卿 (朱)

降そめしあしたにみばやをのづからおきの小島を庭のしら雪

聞恋

中院宰相通純卿 (朱)

先のよに契りやをきしおも影を」24才きくよりやがてみるばかり  
なる

俄逢恋

水無瀬宰相兼俊卿 (朱)

こよひともかねてさだめぬ契りこそまだうちとけぬ心なるらめ

忘恋

西洞院円空 (朱)

いかにせむ人のこゝろのたね時てわすれ草おふる野辺となりしを

名所松

勧修寺経広卿 (朱)

ときはなる陰をためしにことの葉も」24ウ猶世にたえぬわか  
の浦まつ

田家

七条少将隆脩卿 (朱)

つくりをく田面にうくる山水を身のたのしみに住やなれけん

神社

竹内門跡良恕 (朱)

おきの海のあらしなみ風しづかにと都のみなみ宮つくりせり

奉備 御陵

伊勢祭主友忠 (朱)

おきのうみのあわれおもふ人はありと」25才とふにこたへず浦風  
や吹

(一行分空白)

右近衛権少将藤原兼原謹書

(一行分空白)

(7) 隠岐国 後鳥羽太上皇の御遺蹟いかにいますらんとみたてまつる

べき心を道として、千里をも出たつ足もとにめぐらし、かちよりし舟よりして参りつきぬ。打みるより浦山はるぐと」25ウ世をはなれてゑをもかゝまほしくいはん方なし。やがて近くしぶらふ僧にあなひして 御はかをおがみ奉る。しばらく法施して年月のほいかなひぬとおつる涙なに、つゝまむともなし。しかあれば今上より御いのりのため御太刀御馬進御あり。院の帝の御製を はじめいづれも奉納し侍し。院の御をばあまたゝびかそえたてまつる。されば延応元年の後、としは百を四かへりにおよび代はたつきあまりになんなりぬる。いかなる因縁」26才にか御たまのありかにまぼろしならでも尋ねきたり。侍る事久堅のあめをきはめしもきなる泉までにしてからうじて蓬がしまもとめけんもひとつ心にやと覚えしよろこびにたへず。猶をろかなることの葉をさへみじかき筆にとゞめ侍るなむ空おそろしくこそ。

氏成上

千いろある陰をめぐりの古跡にすゞしき道はとめてこそしれ」26ウ

岡のべのまつひのひゞきにひかれてや夕の風のかほりきぬらむいにしへをおもひやりても身をやくはおきのこじまの明暮の空おろそかにつかへこし身の日のひかりへだてずてらせ行末のそらながめせし君にひかれて草も木もおきの小島はむつまじきかな朝ゆふにひゞく山風浦なみに」27才こゝぞうき世の中の島なる越てこし舟路はあやし風ふけばおきてしら浪龍田山をも故郷はなみぢへだてゝこゆるぎのこがめならでもおきに出にけりわたつ海やさかひもみへぬ沖にきて空こそ舟のたより也けれ

[401]

なぐさめてゑにかゝまほしはるかなる都もおきもへだてなきまで」  
27ウ

よみ直しみどりの洞の花にみむ名はおきながらわかのうら浪  
世の中にたねはのこるも色はななきみ言葉の花に尽して  
しづみしもなき跡の名のいやたかき君こそきみが代をてらすらめ  
いつまでと空にはしるや法に入こゝろの〇よどむかぎり本の  
色かへる身こそあだなれ人しれぬ」28才心ばかりは隠岐の島守

(一行分空白)

(8) 苅田山御陵え奉納

中湊

こま大和中のみなとにゆくふねも世わたる道やかはらざるらん

隠岐小島

神代より国ぞ動かぬ散すてふあはとはいはしおきの小島も」28ウ

西里

よそよりは来るてふ事のいちじるく西里すゞし秋のはつかぜ

高田山

神のます高田の山と木綿かけてなびくは雲も心ありけり

鼓高

うつ音も治りけらし莓むして鼓の嵩の名のみきく世は」29才

御陵

葛多山こけの下露ふるき世のあはれて濡ぬ誰袖(に丸)もなし

成沢池

水煙爰にたてるもなるさわのいけのかゞみに富士うつすらし

隠岐海

入かたはから紅よおきのうみ本ノマ、のにしてなる日を袖にひたして」29  
ウ

籬島

しら浪のかさなる色にをのづからきくのまがきの島かとぞみる

隠岐外山

なみにうくおきの外山の雲かすみゑぞいひしらぬ春のあけほの

成沢池

うき人にうらみもふかく成沢の池の玉藻におもひみだれて」30才

小峰島

しほ風に小みねのしまもこゆばかりあら磯なみのおとのはげしさ

隠岐小島

日の影もおきの小島に入と見えてうみづら遠く雲ぞほのめく

(9)

詠三十一首和歌毎首冠字 沙弥澄覚」30ウ

おきつかぜふくものどけき浦なみにはるをうかべてかすむしま山  
くれたけのかげをやどりにともなふもかれぬかきほのうぐいすの  
ころ

やま沢のゆきげもけふを初わかなこほりながらにつむぞすくなき  
まづさくは窓のかたえの朝日かげほのかに匂ふ花のむめが、  
のるこまのころもいさむ桜がり」31才花のかげゆくみちはなづ

ます

おりやつすわらびはたけし岩かけにはなさくつゝじ色ぞめとまる  
ところえてかはづも水の春やしる井手のやまぶき花ぞさく頃

ろうたかくむかふみどりの山はれてはるのかすみはたちもとまら  
ず



かをとめてとふも五月のほとゝぎす花たちばなのかげならすこゑ」  
31ウ

しみづゆく木のしたかげにやすらへばむすばぬさきも袖ぞすゞし  
き

たなばたのあふせを契りいく秋はためしたえせぬかさゝぎのはし  
もとあらのかげあさからぬ露の雨を花にみせたるみやぎ野ゝ萩

ふりはへてたがゆく袖のおもかげを尾花にのこす野辺の秋風

みねとをくきりのたちどはへだてゝも」32才あらしにかよふさほ  
しかのこゑ

わきてすむひかりは秋のあまつ空くもらぬ月ぞよみにさやけき  
けさまではずゆのかたえのうす紅葉夕日てりそふ色ぞ木ぶかき

手をおれば杉のこずゑの日かずへてうつろふ色に匂ふしらぎく  
みし秋の色のちぐさはいづくぞとたどる冬野ゝしものしたぐさ」  
32ウ

ちどりなくこゑもふけみの浦さえてこほらぬ浪に月ぞこほれる  
あとつけてとふもいとはじみせばやはらはぬ雪のけさのみぎわ

に  
涙行をしのぶたもとよくれなるのいろになみえそしられむもうし

よそながらみしをこふるぞかひもなきゆくかたしらずこゝろわか  
れて

そでまくらかりそめぶしも夢ならぬ」33才契りをたのむ霄のかた  
しき

とりのねをかこたばなどかいそぐらむまだあけぬ夜のきぬぐの  
とこ

ひとすぢにかけても人はしらいとのかたよりながらすぐすとし月  
とてもうき契りなりせば恋わびてかへむいのちをあわれもしれ  
にしの海やきゝわたる世は遠けれどまちかくそでにかゝるうら浪」  
33ウ

しまもりをたのむ手向のもしほ草をきの浪ぢによせてくださむ  
乱世のときしも道のすぐなるをつぎてさかふるしき島のうた

せきの戸の内外のゆきゝへだてなきまもりも君が千とせ万代

むかし思ふこゝろをこめて一卷の法のことばにそふることの葉」  
34才

隠岐のくに源福寺英中都にのぼる時、普門品一卷を書写し奉納  
のつゝで三十一首をさゝげまつる

安永元年冬 入道前大納言 澄寛

(一行分空白)

(10) 奉納和歌 町尻家

十月廿一日隠岐国

後鳥羽太上皇の御廟につかへたて」34ウまつる僧英中のはからず  
もたづね来ければ、やがてめし入てその 御跡のことなどが

たるつゝで袖より一卷を遣し侍りぬ。みればいにし寛永の頃四百  
年の御忌に水無瀬前中納言氏成の 勅をうけて御跡をとぶらひた

てまつられしとき奉納のうたなり。くりかへしよむまゝにむかし  
の御ありさまなどいとおもひやられて懐旧の涙たもとを」35才

うるほす。かねて御跡をとひたてまつりたきことは念願ながらも  
はるかなる浪路をへだて侍れば、今の世にはかゝることはかたく  
なん侍ればいたづらに年月を送りぬ。せめてはかゝる便ならでは

と心ばかりの卑詞をつくり僧につけてかけまくもかしこき広前に  
さゝげむと思ふ。十首の歌のかしら毎に字をならべてつゝしむで  
たてまつる」35ウ

右近衛権少将藤原兼原上

つきせじなむかしながらの水無瀬川ながれての世をあふぐみやし  
ろ

つかふまつるみなをも隠岐の君があとあふぐ世久し遠近の空

しらぬよはよろらみじよあめがしたおさめしきみをおきの島守  
むかしよりつたふる君がことの葉のみちのひかりはいまもふりせ  
ぬ」36オ

手をおりてかぞふるとしも五百あまりこえにし跡のおきの島やま  
たゞならぬ君がみゆきのふる言をおもへばいまも袖ぞしほるゝ

てらせ猶やまこと葉のすへながくよをおもふきみが道のめぐみ  
に

まれにだにそのみありかをとふこともなみのちさとをへだつるぞ  
うき

つたえこしその一卷をみてもなを」36ウくりかへしとふ君がふる  
あと

累代の君をまもりのきみがすむみやあはおきの山とうごかし

明和八年十月二十二日

(一) 行分空白

(II) 奉納和歌詠五十首

春十二首

初春

くるはるのあととはみへけり相坂の」37オせきの清水も氷とけゆく

雪中鶯

春あさき梢の雪のはつ花にほひぞふかき鶯のこゑ

橋辺霞

世をわたる道も有けり信野路やかすみにかくる木曾のかけはし

行路梅

すゑ遠く香を吹おくれ玉ぼこの」37ウ道のゆくての梅の下風

春月

霞しく花の木間をもる月にはるのこゝろをうつしてぞみる

岸柳

かげくらしだり柳のめもはるにけぶりぞわかぬはるの河岸

旅春雨

つくぐと日をもふるかなはる雨に」38オ都の空のながめのみし  
て

遠帰雁

かえる雁かすみのまよりほのかなるこゑぞ消行をちの曙

山花

わけてしも春の名だゝるよしの山むべもかひある花の空哉

関花

さく花も今はの春にあふさかの」38ウあらしはとめよせきの関守

庭花

おのづからちりなき庭の苔むしろ散ぬさくらのかげをししく哉

河敷花

行春をかけてやしのお山吹の花もいろにぞい手の河なみ

夏七首

「社卵花」39才

いがきあれて人もかよわず卵花のしらゆふかくる杜の宮るは

早苗多

いそげ猶千町のさなへとる田子のさばかりながき日をなたのみそ

里郭公

まつとしもいはでの里のほとゝぎすこゝろとをなけ夜はの〇こゑ

岡時鳥」39ウ

みずくさの岡のあととふ杜宇<sup>ト</sup>ねてのあさげのむかしこふらし

夜廬橘

たちばなのかほる枕にねざめして夜ふかき月をまどにみるかな

籬瞿麦

あけ暮は露としもぬる床夏のをのれまがきにしほれふしつゝ

江螢」40才

月もはや入江の浪のくらしき夜に猶かげとめて飛ほたるかな

秋十二首

初秋

うき身にはいつもこゝろの秋の空けふとや風のおどろかすらむ

萩露

おのづからうつればもとの色もなし人のこゝろにはぎの上露」40

ウ

萩風

さらでだに秋はならるのいねがてにゆめやはゆるすおぎの上風

尋虫声

わきて猶まつてふむしの音をとめて露のやどりやまづたづねまし

山家月

そむかでも浮世の外のそらぞみつ心よりすむ柴のいほりに」41才

野径月

武さし野や分行すへの春もなく雪をふきしく月の下風

船中月

雪の夜の光もしるくすむ月をあこがれいづるよその友おね

暁鹿

うき物はあかつきのみとしかやなくなれもつれなきつまのわかれ

に」41ウ

河霧

たちわたる霧にながるゝ耳和河音にやそれときゝもわきける

搗衣幽

小夜ふかみそれかあらぬかたえぐのあらしのすゑにころもうつ  
なり

夕紅葉

そめはてぬ木陰もみえでうすくこくゆふ日色どるみねの紅葉ゝ」

42才

残菊句

おりのこすきくの葉だれの初霜にうづもれぬ香もふかき秋哉

冬七首

朝時雨

月の名もけふ神南備とこのねぬる朝小□原はまづ時雨つゝ

竹霜

霜さやぐ竹の葉山のあさあけに」42ウふかぬ物から風ぞ身にしむ

池水鳥

ふしなれし玉藻のとはこほれどもさすが夜がれぬいけの鳩鳥

島千鳥

たれをかもまつが浦島うらみわび霜夜あまたと千鳥なくらむ

松雪

年さむき雪にもたへてまつがへの」43オかはらぬ色をよそにやは  
みる

潮雪

こほりぬし汀ぞしろき志賀の浦やなみに跡なき雪のあけはの

惜歳暮

いきうしといひてもかへれよしさらば人やりならぬとしのわかれ

路

恋六首

寄雪恋」43ウ

とはゞやな人のこゝろの秋風に雲はあとなきものとやはみる

寄露恋

消ぬともたれかはしらむいたづらに人め忍ぶの山の露

寄烟恋

それとだにえやはとがめぬうき人の契り浅間にくゆるけぶりを

寄草恋」44オ

人ごゝろ身をふるさとゝあれしよりやがて生ぬる忘草かな

寄鳥恋

せめてさほうき物ぞとも鳥のねをわかれながらにかこつ夜もがな

寄枕恋

身にそへてなをふしわびぬよもすがら君が手ふれしつげの小枕

雑六首」44ウ

暁述懐

身も清くこゝろも澄るあかつきはにされる世をもうでやとぞ思ふ

閑中燈

見るふみのためとしもなきまどの中にむなく残る夜半の灯

山旅

白雪のかゝれる遠のひとつ松行ゆくさきの高嶺なるらん」45オ

海旅

老おもふ涙も月にうかびいでぬ身さへ浮寝の浪のまくらに

野旅

いかなれやいく夜もおなじ野辺の露夢はむすばぬ草のまくらに

寄松祝

とし浪をかけてふきこせ家の風すゑをぞたのむ和歌の浦まつ」45  
ウ

此愚詠五十首者今時倉皇不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>案排<sub>一</sub>。故撮<sub>二</sub>其旧藻<sub>一</sub>。清写

以奉<sub>二</sub>納宝殿<sub>一</sub>也。唯信<sub>二</sub>所<sub>一</sub>至而不<sub>レ</sub>恐。神鑑之明必矣。

壬申五月二十有余日 著作郎古藤末枝為景」46オ

(12)天和二稔六月廿二日 隱岐院を守護し奉る供僧の中源福寺快真と  
いへる僧初て来臨せしめ侍りけるに

後鳥羽院御影を拜せさせ対顔のつるでに隱州の御陵の御事をはじ  
め万相尋侍候るに、祖父氏成参詣之頃までは供僧など六坊参勤あ  
りけれど今は貧しくおとろへて源福寺来迎坊ばかり残れる由聞て

をほけなくも」46ウいたましく存、快真今はとて帰るさに請てを  
くり侍る 氏信

おきの島ふるき軒端の夏衣けふまでかたる人はむつまじ  
言の葉の花のみやこにさかへしも君のみそではおきの島守

(13) 後鳥羽太上皇隠州の御陵の守りめなりける源福寺の僧快真六月廿

二日水無瀬の 御影堂にまう」47オではべりける比、そのかみに  
四といふ百年の御年忌とぶらい奉るけるに、乃祖黄門氏成卿内よ  
りの御つかひとしてかの島へまいりてよみて奉られる歌なども  
てきたりぬ。見るに昔の事など思ひやられてよみてつかはしける

兼豊

とをつおやの跡をしたへてつかへ来し君に手向の水苔土のあと」  
47ウ

(14) 隠岐国の 御廟に侍る僧ののぼりて島の御事など語きこえて、あ  
すとかえると申ければ、その御跡につかうる人とおもへばいと  
なごりありて

来てかへるそのなごりさへつきせぬはきみがすみこしおきのしま  
人  
いそぎ出たつといへば何を申かわすともなくて  
なつかしき君がみあとにはてばやなこゝろを人につくる世ならば

氏孝」48オ

(15) おもひがけず隠岐の御旧跡の僧のたよりあるよしきつゝ香花を  
さゝげしかばかの僧まりてあふは因縁のかたじけなきを思ふ折し  
も、きのふ廿二日ある所よりよしの山の苔清石の苔をくくりしか  
ばかの僧に供養をたのむとて

これもまたえにしをむすぶ苔清水おなじむかしの涙をぞくむ

澄覚

(16) 灰仏 聖観音卅三尊

厨子これはやんごとなき御筆のものゝ反古を」48ウ灰となし仏鉢  
につくる幸の便なれば源福寺に納む。常に供養すべし。毎年八月  
六日ごとくに供養あるべし。わざと子細をくはしくしるさず。崇敬  
すべし。

安永元 年十二月廿二日書 入道大納言澄覚拜

(17) 夏日同詠三十首 和歌 蔵人左近衛将監俊治

春七首」49オ

波のはなもいく世かこゝに水無瀬河山本霞む春は来にけり  
霞てはをのが常盤の山の名もうづもれぬべき朝ぼらけかな  
誰か今匂ひもそまん桜ばなはなはむかしの春に咲とも

明やすき光を空にたちこめて霞むもあかぬ春の夜の月  
きえぬ木も花とはしるし春の日の」49ウひかりにあたるみねの白  
雪

春はまず花ぞをそきとみし色のくるゝもまたで又うつるらん  
打かすむ絶間もみえで藤なみのゆふ日の匂ふ岡のべの松

夏三首

鳴そむる声のほひに郭公はな橘の陰もとむ也  
とり初し日かずもいかでわがなへの」50オうふる千町はかぎりな  
ければ  
難波江や芦火たくひのそのまゝに行ゑしらぬは螢なりけり  
秋はまづ心の色ぞかはりけりつゆよりさきの袖のなみだに

七夕のけふの逢瀬に明かよへ世々にかはらぬ和歌の浦かぜ  
 咲とみてやがてしほるゝ權にきえをあらそふ花の上露」50ウ  
 浅茅原たのめもをかたづぬれば有明の月に松むしぞなく  
 さしいづるひかりとゝもに夕波の月にぞちぎる奥のつりぶね  
 行舟によるべはしらじはるゝと見しやいづくのよどの河ざり  
 あずもこむ猶色そへよさよ時雨あかぬ夕の峰のみみぢに

冬三首」51オ

花にみしやどの木草の春秋もわするゝ今朝の雪のしづけさ  
 浦づたふ波路にともや松しまの小島の千鳥ひとりなく夜は  
 あだにのみをくるはやすしとしの暮なす事なしと猶をしみても

恋七首

はらふべきあさぢが露もおきとめてとはれぬ夜半の月ぞうつろふ」

51ウ

朽ねたゞ名のみ忍ぶのすり衣もりてかひなき袖の涙に  
 問まじき心はしりぬ袖の露玉とも人にみへじとぞおもふ  
 かれせぬもなにの契りぞおもひ草秋の末葉の霜もいとほで  
 あふ夜半に明るしるべは憂ものとおもはぬほどの鳥の声かな  
 みし草のその面影もわすられず」52オかたみに残れつげの小まく  
 ら

まくず原うらみむ風のたよりもかきつくしてよ水くきの跡

雑三首

明やらで猶かぎりなき秋のよを待も久しき閨のともし火  
 露はらふ野寺のかねのふくる夜に里とひかぬる草の下道  
 君が代にあへるを道のひかりにて」52ウむかしにかへれわかぬの浦

まつ

俊治竹内也。独吟なるべし。同字いかゞ。澄覚説

(18) 一 普門品一卷

奉為

上皇尊儀御菩提書写之、寄<sup>二</sup>附于隱岐国源福寺<sup>一</sup>

安永元年冬、沙門澄覚拜写

(19) 一 般若心経一卷 冷泉大納言為村謹書」53オ

明和七年二月廿九日 受戒澄覚

御因縁あつく隱岐の御旧跡に奉る

五百年のその世も遠きおきの国君がむかしをしたふことの葉

澄覚

印

(二行分空白)」53ウ

是より地下人

(20) 御奉納

後鳥羽院の御陵にまいりて

浪かけし袖に袂をきゝわたるむかしもかくや隱岐のしま山

忠聖

右延享三年寅四月 巡見使 伊奈兵庫

御陵の方をはるかにあふぎ奉て

あはれ聞磯のまつ風浪のおといまだにかゝるおきのしま山」54オ

武

右同年 伊奈兵庫家 久松志津摩

浪寄する隱岐の島山いまさらにはむかしを掛けて袖ぞぬれける

右 堤甚内源長羽

後鳥羽院の御寺に一夜を明して

舟つなぐ余波ばかりを言の葉に思ひつゞけておきのしま守」54ウ

右 浅野島右衛門源紀編

忠虫カ

人とわぬ野はら淋しき夕暮におぼつかなくも松むしのこゑ

右 石州銀山 水田幸十郎光治十一才

鶉

夕まぐれ野はらさびしくなく鶉とこの草葉に秋かぜや吹

右 同所 兒子十三歳」55才

上皇住せ給ふ古寺へ奉納なし奉る

妙なりし法のひゞきも古寺に声なくかよみねのまつ風

右 栄澄

冬月

紅葉せし山もあらしに冬がれて月より外の秋は残らし

右 石州大森 吉田藤十郎 藤原久遠」55ウ

後鳥羽上皇御忌日に詣奉りて

けふとてや勝田に声を忍ぶらむむかしのまゝのやま時鳥

右 石州節庇山主計 僧給阿

御殿 奉納□□之内  
焼火山

あら尊□あり□す今花の道

右 石州大森 岡田氏石可」56才  
右 中納言朝忠 花山院前内大臣定謙公

(2)

あふことのたえてしなくはなかくに人をも身をもうらみざらまし

水無瀬氏孝公

君が世にあへるはたれもうれしきをはなはいろにもいでにけるか

な

うぐひすのなけどもいまだふるゆきにすぎのはしろきあふさかの

せき

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋のゆふぐれ」56

ウ

注1 「万葉集」卷十一「神南備の浅小竹原の女郎花思へる君が声のしるけく」、「夫木抄」卷十一「露かけてをらば惜しけん神南備の浅小竹原の秋

萩の花」のように「神南備」と「浅小竹原」の組み合わせがあることか

ら、「こも」竹」がふさわしいかと思われるが、「竹」とはよめず、「見」

「欠」「貝」のようによめるので不明としておいた。

注2 源(竹内)俊治の官職から「蔵人左近衛将監」がよいが、書写者はよ

めなかつたらしく、「蔵」と「人」を合わせて一字のように書いている。

今仮りに「蔵人……」としておいた。不明箇所については、「源」が適

当かと思うが、そのようにはよめず、不明としておいた。

注3 「藤」について、書写者はよめなかつたらしく、「蔭」と「氷」とに

分解して書いている(『宝物之記』も同じ)。いま「藤」としておいた。

注4 「秋七首」が落ちている。『宝物之記』も同様である。

注5 「石」の字、「不」ともよめる。

付記 本稿は平成元、二年度科学研究費補助金(一般研究B「隠岐流  
人に関する研究」)の研究成果の一部である。